

「推し活」と集団心理の関係についての探究

2023 年度 2-A 28 奈良橋 篤生

★研究の背景

近年の「推し活」の市場は急速に膨張している。

「推し活」は多くの人間を一つの方向に持っていく身近な手段だ。

一つの物事に熱狂する人々が集まり、一心に対象者(物)の活動を応援する。これは集団の安定性を加速させるためにはとても有効な手段なのではないか。

実際に、ある友人は、「推し活」の一環でライブに参加したところ、現地で知らない人同士のコミュニティができてしまったと言っていた。

そこで、「推し活」を利用して安定した集団をつくるには、どのようなやり方でどのように纏らせればいいのか、考察することにした。

★「推し活」と「集団の安定」の定義

ここで、探究を進めるうえで必要な事項を定義しておく。

- ◇「推し活」…一つの対象者(物)に対して、大勢の人間がまとまって熱狂し、推進活動や経済活性化などをするという行為。
- ◇「集団」…一定の秩序の上で成立している人間同士のコミュニティ。
- ◇「集団の安定性」…集団における方向性や秩序の統一性などの値で解析する値。
- ◇「同調圧力」…集団の内部で働く、ターゲット同士でより均一な行動に出ようとし、出ない者にはじわじわと心理的負担がかかっていくという一種の現象。

★現在の「推し活」とその動向について

現在の「推し活」は、先ほど定義したように、一つの対象者に向かって不特定多数の人間がまとまって熱狂し、みんなで同じようなことをして対象者の推進活動やそれに関連する経済の活性化などを行っている。

アイドルはその最たるものだ。アイドル本人(対象者)が民衆(ターゲット)の前でパフォーマンスやファンサービスなどの利益を提供し、それに応えるようにターゲットは一致団結してヲタ芸や掛け声などで応援する。グッズを購入したり、対象者に寄付したりすることにより、もとの対象者からの利益よりも大きな利益をもたらしている。そしてその利益によって、対象者はより大きな利益をターゲットに還元させているのだ。この繰り返しで、より対象者の勢力は増していく。また、より多くの利益を受け取ったターゲットは、対象者への沼へとどんどんはまっていき、抜け出せなくなっていく。そうすることで、このサイクルは回っているのだ。この時、ターゲットはターゲット同士で無意識のうちに団結している。皆で同じ振り付けのヲタ芸やレスポンスなどをして、行動を共有するのが文化になっているからだ。また、ターゲッ

トは確実に「対象者」という名の同じ趣味を持っているため、より容易に団結することが可能になるのだろう。そんな行動を積み重ねれば、民衆は立派な集団になっているのだ。

その集団は一点(対象者)に向かってダイレクトにつながっているため、簡単には崩壊しない強固なものになっている。また、ターゲットは対象者からの利益の向上に比例して増えていくため、集団はどんどん大きくなり、サイクルがより回るようになるのだ。

アイドルの話に戻すと、アイドルはいつか消滅(解散)するのだが、その後もその集団は残り続けることがある。これは、それまでつながっていたコミュニティの中心がいなくなっても、外周の結びつきも強固であるために発生する現象だ。ここから、「推し活」で発生した集団は、ターゲットから対象者への一方的な平織りのような関係だけではなく、フェルトの繊維のようにたくさんのターゲット同士の関係も強固であることが分かる。よって、「推し活」は、集団を安定させるのに有効な手段であると考えた。

★推し活の集団と他の集団との共通点

推し活におけるこの利益関係は、宗教にも当てはまるのではないだろうか。中心には神や教祖といった「対象者」がいてご利益や運氣といった利益を提供し、それに対して信者(ターゲット)は礼拝やお布施などの利益返しをし、その利益によって対象者は…というサイクルが発生し、より大きく育っていつている。これは先程のアイドルの例にピッタリと当てはまる。また、心の休憩場の役割を果たしているのも同じだ。「推し活」では対象者を一心に応援することによって日々の心の疲れを忘れ、宗教は礼拝することによって同じように心の疲れを癒している。ここまで重なるということは、「推し活」の効果≒宗教の効果であると考ええる。

他にも、これに当てはまる集団として、戦時中のナチス・ドイツが挙げられると考える。この場合、先ほどの宗教の例とは現象が少しずれるが、集団の構造は同じである。中心にはヒトラーという「対象者」がいて、国政や国民に対する指導などを行うという利益を提供し、国民(ターゲット)はそれに応えるように、皆で団結してヒトラー政権に加勢していく。この繰り返しである。宗教の例との相違点は、「強い同調圧力が掛かっているか否か」だ。この場合、たとえ対象者のことが嫌になっても、対象者に加勢しなければ身の危険にさらされてしまう。よって、ターゲットは強制的に対象者へ利益を送らなければいけなくなり、最終的にはその状態に脳が慣れ、洗脳状態になってしまう。この繰り返しにより、集団における一時的でかつ抑制的な安定が戦時中に生み出された。しかし、「一時的」で「抑制的」であるため、安定した集団の本質を突き詰めていくと、この例において、本当に安定した集団を作ることはできないと考えられる。ターゲット全員が納得し、不満がお互いに生まれにくい(生まれても和平的にお互いに解消し合える)状態でない、安定させるのは不可能に近いのだ。その点、このナチスの例よりは、自ら望んで推進する、アイドルの例や宗教の例などの方がも良質な安定した集団を生み出すことができるのだ。このように、同じような構造の集団でも、ターゲットの納得具合や同調圧力の掛かり方などの要素により、本当に安定するか、崩壊しづらいかなどの要素が決定してしまうのだ。

☆推し活の原理を使用した集団の安定性の増強

この現象を利用して、混沌としている集団を安定させることはできるのだろうか。これを実際に検証するには大規模な実証実験をしなければならないため、ここではイメージによって整理する。まず、このイメージ整理における大前提を整える。ここでは、混沌としていて統一性や協力性がほとんどない集団がひとかたまりあるとする。その中から、一人「対象者」になる者が現れるとする。ここからどう集団が変化していくのかイメージしていくのだ。大前提は以上だ。では、実際にイメージをしてみよう。まず初めに、対象者は誰からも認知されていない状態であるため、最初からターゲットたちを動かすことはできない。そこで、対象者はターゲットに対して認知度を上げるような行動に出始める。他人とは違う行動、そして世の中を良くしようとする行動に出て利益を与え始めるのである。そうすると、対象者は目立ちだし、徐々にターゲットたちに認知され、集団が一つになっていく。最終的には、最初の集団の中の多くの人間がターゲットになり、対象者もそれに応えるようにより大きな利益を提供するようになり、集団は安定していくであろう。これは、羊の群れの中に山羊を一頭放したときに、もともと気の弱くて崩壊しやすい羊の集団だったのが、よりリーダー性が強い動物である山羊が羊を率いて、強固でかつ平和な集団になっていく現象とほぼ同じである(引用①)。

しかし、現実的に考えると、こんなにも順風満帆に物事が進むとは考えにくい。よく世の中で起こるパターンとしては、「対象者が複数人出現してしまう」というものが挙げられる。対象者同士がお互いに納得し合ってひとまとまりの集団にしていけるのならば問題ないが、お互いの志向が違となると、集団は一つに安定しないし、争いが起きて安定性が崩壊してしまう可能性もあり得る。また、最初に出現した対象者が一人であったとしても、それをまねて別の対象者が出現する可能性もある。この場合は、後から出てきた対象者は、初めからいた対象者よりも良い利益を提供しなければ、ターゲットについてきてもらえないため、最初の対象者よりも頑張っ、少し志向が違うものを主張しだす傾向がある。こうなると、最初の対象者は「パクリだろ」と思い、両者間の争いになってしまう可能性が高い。他にも、対象者が途中から方向性を誤ってしまう可能性がある。最初からターゲットの思うことから逸れていたら、集団は形成されることはないが、途中からの場合はとても厄介だ。もうすでに安定の域に達していた集団の中にターゲットたちの不満が溜まっていくと、ほぼ確実に反乱は発生するし、他の集団と手を組んで、内部からも外部からも崩壊にかかる可能性だってある。最初のイメージ通りに、順調に一つの集団に、一つに安定させることは難しいのである。しかし、逆のこともあり得るのだ。最初は小さい集団であっても、次第に志向が合う集団同士でくっついて、大きく、より安定した集団になっていくこともあるのだ。この正反対の二つは、ほとんどの場合可逆関係である。この関係を活用すれば、一度崩壊した集団を別の形で再起させることも可能であると考えられる。考えれば考えるほど可能性が出てくるが、今回は、この可逆関係に着目して、推し活を活用していこうと考えた。

★推し活を活用した集団の崩壊化

先述したように、対象者が下手な方向に行動すれば、集団を崩壊させることも容易くなる。どうやって崩壊させることができるのかをイメージし、そうならないよう行動すれば、集団の安定化に一步つながるだろう。ここからは、先ほどとは逆のパターンをイメージ整理する。なお、大前提は先ほどと全く同じものとする。対象者はターゲットに全く認知されていない状況から、ターゲットに認知されるよう行動を始める。相違点としては、その行動が世の中的にあまり宜しくないものである点だけだ。これでほぼ180°結果が違ってくる。しかし、たとえ宜しくない行動をしたとしても、少なからずターゲットは対象者についていこう。なぜなら、集団が存在していない混沌とした状況下では、人がひとかたまりになろうとする現象が発生する場合がほとんどだからだ。人間という生物は、社会性が極めて発達しているために、このような現象が起きてしまうのである。この影響で、少しずつ集団が形成されていく。このままだと集団は安定していくが、対象者はあまり宜しくない行動をしているため、次第に不満が出てくる。これを聞き入れ、改善したらもちろん素晴らしい集団ができるが、崩壊するとなると、もちろん聞き入れることは絶対にしないであろう。そのまま悪行を続けていけば、不満はついにターゲットを動かし、ターゲットが団結して蜂起し、対象者を襲うことによって集団は自然に崩壊してしまうのである。だが、この時に別の安定した集団ができているのがお分かりだろうか。集団が崩壊するとき、ターゲット同士で一致団結し、対象者に向かって蜂起しているのだ。星が寿命を終える(崩壊する)と宇宙の塵になり、それが再び集まって新たな星になる(集団が形成される)ように、集団の崩壊と結束・安定は紙一重なのである。その集団は悪しき大権力を打破するために作られたものであるため、とても安定している集団になるであろう。このようにイメージ整理をしてみると、やはり集団安定の可逆性が見えてきた。崩壊が起これば集団ができ、集団同士で争えば、最終的により安定した集団が形成されていくのである。やはりこの状況は天体に似ている。集団同士の争いの例についても、小惑星同士でぶつかり合い、次第に大きな重力を持った星になるのにとっても似ている。これらのことから、これらの可逆性のある現象を、仮に「集団新星現象」とでも呼ぶことにする。

★「集団新星現象(仮)」について

この現象は、今まで紹介したもの以外でも、集団安定の周期や、集団とその外部との関わりなどとも関連付けることができる。これからの研究にも活用していくため、現象をここで定義しておく。

◇「集団新星現象」…集団の崩壊や結束・安定における人間の行動・まとまり方の中で、特に可逆性があるできごとの総称(仮)。

これは、行動心理学における色々なパターンに当てはめることができるであろう。

★集団新星現象を利用した「推し活的な安定した集団」の作り方

これを利用すれば、最初に述べた単純なやり方以外にも、様々な手段で安定した集団を形成さ

せることができるのではないのであろうか。対象者をわざとたくさんに増やし、それらをわざと争わせ、和平的解消が実現するまで続けたら、とても丈夫で崩壊しづらい安定した集団ができるのではないのであろうか。また、最初にわざと崩壊させる前提であまり丈夫ではない集団を作り、その反感のパワーでターゲットたちを団結させ、その集団の内部でとても結束力の高い安定した集団ができ、最終的には、最初の集団の殻を破るのではないのであろうか。この2パターンの場合、対象者による補助があるが、最終的にターゲットの集まりによって自らの意思で集団が形成されていくため、シンプルに順調に推し活的な集団を形成させる(対象者がほぼ全ての要素を決定する)よりも、より不満がなく、より結束力も高く、より平和が保たれやすい集団になることが予想される。また、もちろん、最上級の利益をターゲットに提供している前提ではあるが、対象者が少しダメ(反感を生まないほどに)であるのも良いかもしれない。こうすることにより、ターゲットたちの中で「対象者を自分たちで支えていかなければ」という考えが芽生え、ターゲット同士で結束しだすのだ。これは、物とそのユーザーに対しても当てはめることができる(引用②)。このように、手順を逆、または変更することにより、集団の安定性は変化する。この現象には、どうやら可逆性のほかにも、増強や減衰の要素も入っているようだ。これらの利益関係とダメさを上手に調整することにより、対象者を中心とした、安定した集団ができるのではないのであろうか。そして、調整を繰り返すことにより、ターゲットからの不満が最小限で、団結力や平和性の高い集団ができるのではないのであろうか。無論、完璧に安定した集団を作ることは非常に現実的ではないが、それに近づけることは容易になるであろう。

☆このイメージ整理・現象のまとめと今後の展望

友人のアイドルの話から発展した当研究だが、今回はより安定した集団の作り方をある程度考えることができた。ここで、今までの内容を整理する。

- ・「推し活」のように、とある人物を中心として、その周囲にたくさんの人が集まり、お互いに利益を提供し合っていくという、集団の作り方もある。このとき、ターゲット同士でも結びつきが発生する場合がほとんど。
- ・同調圧力による支配では、真の安定した集団は形成されない。また、お互いの利益関係がしっかりと成立していない場合も形成されない。
- ・対象者は大きな力を握ることになるため、少しでも間違えたら集団自体が崩壊しかねない。
- ・外部からの力によって集団が崩壊する可能性もある。
- ・ただ、崩壊するということは、新しい、より強靱な集団が形成されるということである。
- ・崩壊をわざと利用し、とても安定した集団を作り出すことも可能であると考えられる。
- ・このように、集団の安定性には、可逆関係と増強関係を持った現象がいくつも存在し、それを調整することによって、安定した集団を作ることができると考えられる。

以上のことが、今回で明らかになったことである。

今後は、機会があれば、クラスやインターネット内などで人を集め、どのような条件だとより

安定な「推し活的集団」を生み出すことができるのか、検証してみたいと考えている。また、世の中の事件やニュースを読み解き、「集団新星現象」のパターンについても追及していきたい。今回は、いろいろな研究に活用できそうなベースを考えることができ、有意義であったと思う。

★出展・参考文献

(出展①)…<https://blog.goo.ne.jp/mkitajima6071/e/11d772c845fdc3a48d1db6b1b695dc65>

伊皿子坂社会経済研究所「#989 羊の群れに山羊を混ぜると」2018年02月08日

(出展②)…https://bike-lineage.org/etc/bike-trivia/usa_motorcycle.html

バイクの系譜「アメリカにおけるオートバイメーカーの評価」

全体の参考…https://waseda.repo.nii.ac.jp/record/59098/files/KyoikugakuKenkyukaKiyobetsu_28_2_25.pdf 井口武俊・河村茂雄 2021年3月

「学級における同調圧力がもたらす否定的側面とその改善を検討した先行研究の展望」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssp/20/1/20_KJ00003724965/_pdf/-char/ja
新井洋輔「サークル集団における対先輩行動」2004年

★協力していただいた方々

- ・アイドルオタクなとある友人(話題提供)
- ・帝京大学の伊藤凜さん(研究協力)

2024年2月24日 奈良橋篤生

©2024 Atsuki Narahashi